

平成 27 年度「お茶の京都を支える宇治茶生産アクションプラン」検討会議 議事概要

- 1 日 時 平成 27 年 9 月 2 日（水） 午後 2 時から午後 4 時 30 分まで
- 2 場 所 京都府庁福利厚生センター 第 2、3 会議室
- 3 内 容 「山城東部地区の茶業担い手確保・育成対策について」

【平成 26 年度取組状況について】

（委員の主な意見）

- 平成 30 年度数値目標荒茶生産量 3,300 トンとなるよう生産量を増やすためには、担い手対策に力を注ぐべき。
- 平成 27 年度からの宇治茶生産景観継承支援事業については、覆い下茶種の安定価格の背景を受け生産者からの要望が大きく、来年度以降も継続して実施してほしい。
- ボトリングティーについては、消費者のリーフ茶離れに一石を投じることを期待している。

【論点 1 山城の煎茶地域の新規の担い手を確保・育成するには】

＜覆い下茶への転換＞

- 和東町と南山城村の煎茶単価の格差の大きな要因は、和東町は被覆した茶（かぶせ茶までの期間）を煎茶として上場している点数が大半を占めており、純煎主流の南山城村とは単純比較にはならない。
- 京都府は煎茶に固執せず、覆い下茶にシフトするなど、経済的な生産力を高めていくことも重要。
- 南山城村については、平成 27 年度荒茶生産量（二番茶終了時点）の 1 / 4 がてん茶の生産量となっており、南山城村は以前と比べて煎茶地域ではなくなっている。平成 26 年度、南山城村に国庫事業で新設されたてん茶工場の稼働により、てん茶の生産量が増加し、有利販売につながり産地が守られた。
- 煎茶農家が茶業を継続していくためには経営安定が必要であり、煎茶生産だけでなく、覆い下茶への転換等選択肢が重要。
- 初期投資は茶工場の整備だけでなく、被覆資材の導入や従来のやぶきた品種中心から京都で育成された品種への転換も必要。

＜茶園・茶工場の整備＞

- 中間管理機構を利用する場合は、茶園を整備する必要がある。
- 新規就農者で成功しているところは、農家が犠牲を払って農地等を提供。
- 茶工場は家の敷地内にあることが多いので、やめた生産者の機械等をばらして他に流用することは困難。
- 北海道の酪農では、中間管理団体が修理して貸し付けるシステムがある。

- 京都では他産地と比べても個人工場の割合が高く、機械更新を余儀なくされた時点での機械投資の判断の際に茶業をやめる生産者が多くなってきている。
- 機械の壊れた工場を借りたとしても、修理をしないといけないので、投資は必要になる
- 茶は生育期間が長いことが、新規就農者のネックであり、そこを支援する事業・対策が必要。

<担い手の育成>

- 茶に無関係の出身者は、担い手となりにくい。農家子弟で、現在後継者となっていない者に働きかけ、産地に戻って後継者とする方向がよい。
- 生産者が販売やマーケット開拓も行う経営が成功する一つの方法。
- 茶価が向上しても経営費がそれ以上増加しては意味がない。経営感覚のある担い手を早急に作ることで、経営を学ぶ場が必要。
- 生産者のスターを作ってほしい。生産者をもっと表に出し、消費者と接することで、生産者もモチベーションが上がる。
- 生産者が茶業をやめる際に、技術力を継承する場も大事。後継者育成も大事。
- 会社員からの新規就農では知識が必要であり、技能継承や教育の仕組みが必要。

<受け入れ体制づくり>

- 茶業は生産・製造・加工の流れがあり、全くの新規参入の就農は難しい。
- 新規就農者で成功しているところは、農家が犠牲を払って農地等を提供。
- 産地にリーダーがおり、そこに人が集まっている産地が伸びる。
- 中丹の成功例が山城でできるか。中丹は茶だけで経営をやっていない。茶だけで成功できるのか分析が必要。
- 茶では新規就農が難しいため、新規就農者を受け入れる法人が必要で、新規就農者が地域で収入を確保できるよう、茶以外の品目も含め、年間を通して農作業ができる体制を地元市町村が支援できないか。
- 新規就農希望者のタイプに応じた受け入れ体制づくりが必要。
- Iターンだけでなく、Uターン（農家子弟）も視野に入れて後継者対策を考慮すべき。
- 適切な受け入れ先があれば I ターンの方や新規の受け入れも可能であり、共同工場や FA 工場など既存のグループが活躍してもらえないか。また、合意形成の仕組みが作れないか。

【論点2 煎茶の価格を向上するには】

＜消費者へのPR＞

- 宇治茶とはどういうものなのかが消費者には分かりにくく、数字等で明確に示せばよい。
- 消費者と実際に接する茶専門店のレベルを上げることが必要。
- 手摘み茶の認証マークのようなものを作れば、高級感が担保できる。
- 消費者ニーズと茶商のニーズがマッチしているか、分析が必要。

＜生産の効率化・安定化＞

- 南山城村は合葉によりコストを下げ、作業を分担することをしている。
- 茶価は業者の買い方や在庫の状況も影響する。平成27年のてん茶が好調なもの、茶商の在庫がなかったからということも理由。
- 全農茶市場での扱い金額は二番茶終了時点で、和東町と南山城村が約7割を占めており、その内煎茶については山間地域の2町村が宇治煎茶の生産を支えている。

＜品質の向上＞

- 宇治茶は品質が優れているから評価されており、今後も高品質な茶を生産する農家しか残らないと考えられる。
- 品質保証をするのは茶商である。

＜輸出用茶の生産＞

- 輸出用茶を生産することで、煎茶の茶価を上げるのに有効かと思う。
- 世界から見ると日本の産地間で違いがよく分からず、宇治茶の高品質を活かした差別化が必要。